

## ソクラテスと2つの愛

野 津 悌

拙稿は、2011年11月3日（木）に国士舘大学世田谷キャンパスにおいて開催された人文学会シンポジウム「愛・からだ・卒業論文」の提題者としてお話した内容の要旨である。

### 1. 大学教育の内実

本日は、今日の日本における大学教育のあり方について、古代ギリシア哲学を研究する者の視点から、お話してみたいと思います。

かなり昔のことになりますが、私が高校生の頃、文学部に進学したいと言った時、ある年長の方に「文学者になるつもりなのか？」と言われて当惑したことがあります。日本において大学が専門家の養成期間として機能していた時代にはそのような考え方もあったのかもしれませんが、しかし、言うまでもなく、今日の日本の大学ではそのような考えは成り立ちません。なるほど医学部に行く人は医者になることを目指しています。しかし、理工学部に行く人がエンジニアを目指しているわけではなく、法学部に行く人が法曹を目指すわけでもなく、教育学部にいく人が必ずしも教職をめざしているわけではありません。まして文学部に行く人が文学者を目指しているわけでは当然ありません。今日の日本の大学はそのような意味での専門家養成機関ではないからです。今日の大学で専門家の養成機関として機能しているのはせいぜい医学部くらいであり、これは例外中の例外であるというべきです。今日の日本における大学は学部・学科・専攻を区別し、それぞれの領域における専門科目を教えるカリキュラムから成り立っていますけれども、その教育は必ずしも「専門家」の養成を目指しているわけではないということです。その意味で、このような教育を本来の意味での「専門知」教育と呼ぶことには無理があります。今日の日本における大学教育の内実は、むしろ「教養」教育の一部として位置付けるべきものであると私は考えます。

ところで、大学教育の内実を「教養」教育の一部とみなすことは、大学で学ぶことの価値をさげるものではありません。このことについては、市民社会の原型を造った紀元前5世紀のギリシアの人々の声に耳を傾けるべきであるように思えます。

### 2. 古代ギリシアにおける「教養」教育の重視

専門家の養成をめざす「専門知（テクネー）」教育と今述べたような広い意味での「教養（パイデア）」教育という対立概念は、紀元前5世紀の古代ギリシ

アに遡ります。また、当時のギリシア人たちにおいて特徴的なことは、彼らが「専門知」教育にくらべて「教養」教育のうちに遙かに高い価値をおいていた点です。彼らは「教養」教育こそが本当の意味での教育であると考えていたからです。

例えば、哲学者プラトンは、「専門知」において高度な教育を受けている人々が、それでもなお「無教育」でありうると考えています。プラトンによれば、「専門知」教育は、「職人的」教育ではあるけれども、「自由人」（市民）にふさわしい教育ではありません。彼のいう本当の教育とは、「徳をめざしての子供の頃からの教育」であり、「完全な市民」になるための教育です<sup>(1)</sup>。このような教育が意味するものが「専門知」教育ではなく、むしろ「教養」教育に属するものであることは明らかです。そしてこのような意味での「教養」教育の重視は、哲学者プラトンの見解であるのみならず、古代ギリシアの市民たちの共通感覚の一部でした。

### 3. 古代ギリシアにおける「教養」の内実

では、古代ギリシアの人々が重んじる「教養」教育の内実はどのようなものなのでしょうか。あるいは、「教養」教育の目標である「徳」とは何なのでしょう。プラトンは、彼の著作に、有名なソフィストであるプロタゴラスを登場させ、彼の口を通して次のように説明しています。「徳」とは「身内の事柄については最もよく自分の一家を斉える道をはかり、さらに国家公共の事柄については、これを行うにも論ずるにも、最も有能有力の者となるべき道をはかることの上手」である、と<sup>(2)</sup>。これは要するに、家の一員として、国家の一員として、正しい判断力をもって、発言し、行動できる能力であるということです。このことからわかるのは、古代ギリシアの人々が、以上のような意味での「すぐれた人」であるための条件を「徳」と呼び、そのような「徳」の実現を目的としての、幼少期からはじまり大人になるまで続く長期にわたる学びを「教養」と呼んでいたということです。

では、その「教養」教育の具体的内容は何でしょうか。古代ギリシアの人びとにとって、少なくともこの「教養」教育の初期段階の内容は比較的明瞭でした。例えば、幼児が周囲の大人達から与えられる躰、さらには、「読み書き」「音楽」「詩人の作品の読解」「体育による肉体の鍛錬」などがこれに当たります。今日でいう初等教育の内容に相当するこれらの教育が「教養」教育の初期段階を構成する具体的な内容であることを彼らは疑いませんでした。しかしその一方で、これらの初期段階の「教養」を身につけた青年たちが引き続きどのような「教養」教育を受けるべきなのかという点については、今日の我々と同様、古代のギリシア人たちも明確な解答を持ってはいませんでした。このような状況の中で、「徳」の教師を自認し、青年向けの「教養」教育の担い手として登場したのがいわゆるソフィストたちです。

#### 4. ソフィストにおける「教養」教育

ソフィストとは古代ギリシア語で「知者」の意味です。彼らは、一定の報酬と引き替えに、富裕な市民たちの子弟である若者を「すぐれた人間」にすることを約束しました。ある意味で、彼らは今日の大学教師たちの祖先ともいえるべき人々です。このソフィストたちの教育内容は多岐にわたりますが、大きく三つの分野にわけることができます。一つには、数学、天文学、文法、音楽、歴史などの様々な学芸。二つめには、神話や詩の解釈を通じて行われる「徳」の教育（物語を素材とする道徳教育のようなものです）。三つめには弁論術。これは今日でいうディベートの技術によく似たものです。

このような教育を通じてソフィストたちが若者を「すぐれた人間」、すなわち、家においても国家においても正しい判断力を備えた人間にすることができるのかと言えば、これは難しい問題です。青年向けの「教養」教育の教師としてソフィストたちが果たした役割をすべて否定しざるわけにはいきません。しかし、彼らが教えた弁論術には、詭弁を弄し、言論の遊戯に陥る傾向がありました。こうしてソフィストたちは、しばしば「青年を墮落させる」危険人物と見なされ、アテナイの市民たちの憎悪の対象となりました。

#### 5. ソフィストとみなされたソクラテス

興味深いことに、哲学者ソクラテスもソフィストのレッテルを張られ、憎悪の対象となりました。実際、当時の有名な喜劇作家アリストファネスは彼の『雲』という作品に、ソクラテスをひとりのソフィストとして登場させ、辛辣な批判を加えています。またソクラテスが国家の名のもとに訴えられ死刑判決を受けたことは有名な話ですが、この時に彼に帰せられた罪状は「青年たちを墮落させた」というものでした。これはソクラテスがソフィストとみなされて死刑判決を受けたということを意味します。このことは、現在我々が、高校世界史、高校倫理などの教科書を通じて学んでいる内容からすると、意外なことも知れません。教科書によれば、ソフィストたちは当時のアテナに非道徳主義をもたらした悪者であり、他方、ソクラテスはソフィストたちを批判した倫理学の父であるとされています。ところが同時代の多くのアテナ市民たちの眼にはそのソクラテスがソフィストであるように映っていたわけです。

もっとも、本当のことを言えば、ソクラテスがソフィストに見えたとしても何の不思議もありません。ソクラテスはソフィストのように報酬を要求することはありませんでした。しかし、その他の点でソクラテスはソフィストと非常によく似ているのです。第一に、ソクラテスもまた博識です。彼はソフィストのように博識を誇りはしませんが、彼が様々な学芸に通じていた事は確かです。第二に、彼は「徳」の教師を自認することはありませんでしたが、彼の関心が「徳」にあったことは確かです。そして第三に、彼もまた論争の名手でした。どんな知者もソ

クラテスの手にかかる途端に無知を暴露されてしまいます。このようにソクラテスはソフィストと大変よく似ているのです。

## 6. ソクラテスにおける「教養」教育

しかし、ソクラテスがそれほどソフィストに似ているとしたら、その後ソクラテスがソフィストとは区別され、その後の歴史の中で哲学者として讃えられているのは何故なのでしょう。それはソクラテスの弟子プラトンのおかげなのです。プラトンは、彼の師であるソクラテスが「青年を墮落させた」という罪状で処刑されたことに大いに憤ります。プラトンはソクラテスをソフィストたちとは全く異なる種類の教師であると信じていたからです。そこでプラトンは彼の対話形式の著作の中にソクラテスを登場させ、真のソクラテスの姿を明らかにしようとします。そしてソクラテスから「ソフィスト（知者）」のレッテルをはがし、彼に新たに「哲学者（知を愛するもの）」の称号を与えます。現在の我々のソクラテス像はこのようなプラトンの努力によるものなのです。

それではプラトンは如何なる点でソクラテスをソフィストから区別したのでしょうか。ソフィスト的な「教養」教育とソクラテス的な「教養」教育の違いはどこにあるのでしょうか。ふたつの点が重要であるように思えます。

ひとつは、ソクラテスが自らを知者とみなさなかったことです。彼は、人間のうちでもっとも知恵のある者は自らに知恵がないことを自覚した者である、と考えました。これがいわゆる「無知の知」です<sup>(3)</sup>。この場合に彼が考えている「知」とは「善美なることの知」、つまり、家においても国家においても正しい判断力を備えることができるために必要な倫理的な知識です。ソクラテスはそのような「知」を自らが未だ所有していないことを自覚し、そのような「知」を「愛し求める」対象とみなしました。その意味で彼は自らを「知者」（ソフィスト）ではなく「知を愛する者」（フィロソフォス、つまり哲学者）とみなしています。その意味でソクラテスは、既に所有している「知」を売り歩くソフィストとは全く異なる者であることになります。

もうひとつの点は、ソクラテスが「知」を愛し求めるときの、方法に関するものです。彼はそのような「知」の探求を、対話という相互のやりとりの中で実現すべきものと考えていました。また、この場合にソクラテスに独特なのは、好んで若者を対話相手に選び、若者がもつ「知」を生み出す能力に大きな期待を持っていたという点です。よく知られているように、ソクラテスは自らを産婆に喩え、自らの役割を、若者における「知」の出産を手助けすることになると考えていました<sup>(4)</sup>。「知」の産婆である彼は、「知」の陣痛を持っている若者を選び、彼を励ましながらか問答し、彼が生み出した「知」を吟味にかけます。ソクラテスが問答を通して若者の「知」を吟味し、論駁していく様は一見ソフィストの論争の術にも似ています。しかし両者の間には大きな相違があります。論争はただ勝つことを目的とするものであるのに対し、ソクラテスの問答は、青年が生み出した

「知」を吟味し、新たな「知」の出産のきっかけとすることを目的とするものだからです。ソクラテスにおいて顕著なのは、「知」への愛と、その「知」を生みだそうとしている若者への愛です。

プラトンが彼の著作を通じて明らかにしようとしたのは、ソクラテスの「教養」教育が、以上のような「知への愛」と「若者への愛」というふたつの愛の上に成り立っているという点でした。既にのべたように、ソフィストの「教養」教育とソクラテスのそれとは一見よく似ています。しかしソクラテスの「教養」教育は以上のふたつの愛があることによって全く異なったものとなります。ソクラテスの「教養」教育は、ソフィストのそれとは異なり、敬愛する相手と共同しておこなう「知」の探求であると言えます。プラトンは、ソクラテスの「教養」教育をそのようなものとみなして、彼をソフィストから区別していると言うことができます。

## 7. 教師がソフィストとならないために

以上、主としてプラトンの著作を手がかりとしながら、ソフィストの「教養」教育とソクラテスの「教養」教育の違いを明らかにしてみました。両者の決定的な違いは、ひとことで言えば「ふたつの愛」の有無です。

ところで、ソフィストの教育とソクラテスの教育との違いがある種の「愛」の上に成り立っているとしたら、これはある意味で大変に厄介な事態です。というのは、これら二つの「愛」は、「愛」である以上、不安定で、コントロールしがたく、場合によっては容易に失われてしまう可能性もあるものだからです。これらの「愛」が失われてしまうとすれば、その代償は決して小さなものではありません。これらの「愛」を維持している時、その教師は間違いなくソクラテスの子孫であると言えるでしょう。ところが、これらの「愛」を喪失してしまった途端、その教師はソフィストの末裔であることになるでしょう。

では今日の大学教師はこれら二つの「愛」を如何にして正しく育むことができるのでしょうか。大学教育が青年向けの「教養」教育を担うものである以上、このことは大学教師にとって重要な問題であるように思えます。

### 注

- (1) プラトン著『法律』の以下の言葉を参照。「それでは、わたしたちの意味する教育なるものを、漠然としたものに終わらせないう、気をつけてください。というのも、11頃わたしたちは、人それぞれの育ち方を非難したりほめたりする場合、誰それは教育があるが、誰それは無教育だと言うものですが、時にはそういう人たちでも、小売りのあきないや舵取り、その他それに類する仕事の才覚では、相当の教育をうけていることさえあるのに、それでもそのように無教育と言うものなのです。これはつまり、思うに、わたしたちの今の（教育）議論は、そうした仕事の才覚を教育と心得ている人びとには、かかわるものではない、ということなのでしょ

う。むしろ、徳をめざしての子供の頃からの教育を教育と考える人びとの、教育論なのです。そのさいその徳とは、正しく支配し支配されるすべを心得た、完全な市民になろうと、求め憧れる者をつくりあげるもののことです。（岩波『プラトン全集13』99頁1－8行、森進一他訳）」

- (2) プラトン著『プロタゴラス』の以下の言葉を参照。「私から学ぶものは何かというと、身内の事柄については最もよく自分の一家を斉える道をはかり、さらに国家公共の事柄については、これを行うにも論ずるにも、最も有能有力の者となるべき道をはかることの上手というのが、これである（岩波『プラトン全集8』132頁15－17行、藤沢令夫訳）」
- (3) いわゆるソクラテスの「無知の知」に関しては、プラトン著『ソクラテスの弁明』（岩波『プラトン全集1』58頁12行－62頁7行、田中美知太郎訳）を参照。
- (4) いわゆるソクラテスの「産婆術」。この点に関しては、プラトン著『テアイテトス』（岩波『プラトン全集2』197頁1行－206頁1行）を参照。